

---

# 夕焼けトワイライト

涼村怜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夕焼けトワイライト

### 【Nコード】

N0668G

### 【作者名】

涼村 怜

### 【あらすじ】

こえ、はじめてきた。一度も話したことのない、クラスメイトの彼は、図書室にいつも来ていた。部活が終わってからの十分間だけ、はしつこの席に座って、本を読んでいた。私も、図書委員の仕事が終わったらすぐに帰る。彼と会話することもなく。ただ、その日は、いつもと少し違っていた。クラスメイトと図書委員の女の子の恋の始まりのお話。

いつものように図書委員の本整理を始めようと図書室に行ったら、クラスメイトがいることに気が付いた。

明るめの茶髪が真っ先に視界に入ってきて、すぐに分かった。

この一年間、この図書室に通っていた彼、だと。

篠川くんはいつもどおり、はしつこの席に座っていた。

ただ、少しだけ違うのは、開いた本をのけて、眠っていたこと。

部活帰りに図書室へ寄ったらしい彼の足元にはスポーツバッグと鞆が置いてあった。

きっと部活で疲れているんだろう。

私と篠川くんはあまり接点がない。

きっと彼は私の名前すら覚えていないだろう。

一、二年は違うクラスだったのだし、当然。

ただ、私だけは、彼を一年のときから知っている。

それは、偶然同じ委員会だったとか、そういうつながりじゃない。

彼は友達が多く、色んな人と友達だった。

私の友達も彼と同じ中学校で、そのつながりで、私も彼のフルネームと存在を知ってしまった。

今まで一度も呼んだことのない、そしてこれからも呼ぶことが無いだろう、名前を。

苗字でさえも、彼に呼びかけることなんてないというのに。

それから数十分後。  
疲れている篠川くんを起こすのもはばかられて、多分、そのうち起きるだろうと思ひ、私は黙々と本の整理をしていた。  
けれど、篠川くんは一向に起きなかつた。

起こさなければ・・・だつてもう下校時間になつてしまふ。  
本当はこのまま放つておいたら、見回りの先生がやってきて、彼を  
起こしてくれるはず。

だけどしたら篠川くんが先生に怒られる、と無駄に焦っているお  
人好しな自分の性格が恨めしい。

日も、傾いている。

夕焼けの空が、篠川くんの髪を照らしていた。

すやすやと眠る彼を見て、意を決した私は、そろりと彼に近付いた。  
先生に怒られるのも、いたたまれないものがある。

「篠川くん」

初めて、だつた。

男の子の肩に触れたのは。

男の子特有の、がっちりとした肩を揺らしながら、名前を呼びかける。  
る。

少しだけ、瞼が動いたような気もしたけど、起きる様子はない。

「起きて、篠川くん」

彼が借りて読んでいたらしい本の、  
開きっぱなしのページにしおりを挟んでから、二度目の呼びかけを  
してみた。

遠くで下校を告げるチャイムが鳴った。

下校時間になってしまったのに気づき、私はまた「篠川くん」と呼  
びかける。

すると、三度目の呼びかけに対し、ゆっくりと目が開かれた。

「ん……」

「篠川くん！もう下校時間になっちゃったよ！早く起きないと……」

「げ……こうじかん？あれ……？あー……」

図書室の窓からは、生徒たちがガヤガヤと帰っているのが見える。  
このままでは私も篠川くんも怒られてしまうのは明瞭だ。

いつそのこと、無理やり引きずってでも……と男女の腕力体重を  
無視したことを考えて始めていたら、

眠そうだった目が、一気にぱっちりと開く。

「わっ……」

それと同時に、椅子に座っていた篠川くんが、ガタンと音を立て、  
勢い良く立ちあがった。

彼の肩に手をおいていた私は思わず肩を揺らして驚いたけど、  
篠川くんはそんな私を知ってか知らずか、素っ頓狂な声を上げる。

「へっ。あっ？……そうだ本！あともう下校なの！？」

「え、あっはい、そうです！あと、これ本、しおり挟んであります」  
おずおずと本を差し出すと、篠川くんは驚いたような表情になってから、ゆっくりと笑った。

「ほんと？まだ途中までしか読んでなくって！」

私から本を受け取ると、鞆の中に本を突っ込む。  
それから時計の時間を見て、「うおっ！めっちゃ寝てた！」と彼は驚いていた。

その様子が少し面白くて、彼に友達が多いのも、わかった気がする。

「それより、チャイムもなつてたから、早く帰ったほうが、」

「え、まじか！じゃあもう帰るよ！」

焦ったような笑顔を見せて、彼は図書室から出て行った。  
私も帰ろうと、鞆を手にとったときだ。

「静香ちゃん」

私の名前が呼ばれた。

声が出た方に顔を向けると、そこには図書室の出入り口に立った篠川くんがいた。

「あ、の」

「ありがと静香ちゃん！そんじゃまた明日ねー！」

そう言うだけ言って、彼は今度こそ帰っていった。

ここからでも聞こえる、パタパタと走り去る音が徐々に遠ざかっていくのを聞きながら、

私は知らず知らずのうちに入ったり込んでいた。

齊藤静香。

この私の名前。絶対、彼は知らないと思っていた。たとえ、苗字は知っていても、下の名前まで知らないと思いきこんでいた。

(なまえしつてた)

彼は、憶えていてくれた。

(こえ、はじめてきいた)

こんなに近くで。

(えがおも)

初めて見た。

篠川夏也。

彼のなまえ。

苗字すら、呼ぶことなんてないと思っていたのに。

初めて触れた、彼の肩、その体温。

耳に心地いいくらいの明るい声。

人をひきつけるような、ものすごく眩しい笑顔。

ゆっくりと熱い息を吐いて、じんわりと汗のにじんだ手を胸にあてる。

彼の姿が、残像になって、頭の中に何度も浮かぶ。

頭の中に、彼の明るい声が、耳鳴りみたいに何度だって大きく鳴り響く。

耳、いたい。

ふれた手が、あつい。

心臓が、くるしくて、たまらなかった。

(後書き)

(・・・静香ちゃんと、また、話せるといい、な)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0668g/>

---

夕焼けトワイライト

2010年10月9日02時26分発行